平成 30 年度　南が丘中学校 学校研究について

１．研究主題　　「学び合い、高め合う授業づくり」
～「学び合い」を通して人間関係を育む教科学習～

２．研究目標

① 「学び合い」を取り入れた授業を通して、「確かな学力」〔基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得と、それらを活用する能力（思考力・判断力・表現力）及び主体的に学習に取り組む態度〕と「人間関係を築く力」を育成する。

② 「学び合い」が活きる授業についての授業構成や指導のあり方、学習課題の設定、意欲を高める諸条件等の研究を通して、教職員の「互いに学び合う同僚性」の向上を図る。

３．研究主題設定の理由

平成28年12月に中央教育審議会から出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について」には、アクティブ・ラーニングの視点から、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、何をどのように学ぶのかという学びの過程を組み立てていくことが重要で、「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、教師の授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることであると述べられている。

本校では、「学校教育目標」に準ずる「目指す生徒の姿」として、「**み**⇒自ら学ぶ　**な**⇒仲間と学び合う　**み**⇒認め合い支え合う　**が**⇒がんばり努力する　**お**⇒己を大切にできる　**か**⇒体と心を鍛える」の６項目を掲げている。その達成に向けた「学校経営の重点目標」の一つとして、「学び合う職場づくり」…

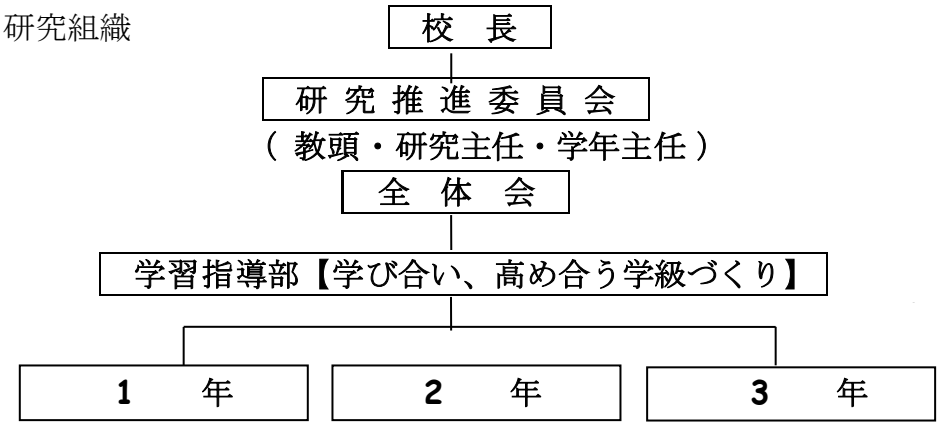
(1) 学校・学年の協力体制を確立するとともに、教育目標達成への課題を共有し、改善・解決に努める

(2) 「学びの専門家」としての同僚性と職務の効率化、迅速化の向上を図る。

ことを共通課題に掲げ、「学び合い、高め合う授業づくり」を目指している。

生徒にとって、学校生活の中で最も長い「授業」が、わからない、つまらないほどつらいものはない。一番の解決方法は「わからないことを聞く」。それも、将来の「生きる力」を育むことをふまえれば、先生よりも教室の仲間に聞くべきであり、聞かれた生徒も、分かってもらうためにはどのように説明するかなど、自分の新たな学びや気づきにもつながる。そして、お互いを高め合うことにつながっていく。そこにはまた、人間関係が構築され、その能力も高まっていくものと考える。

４．研究組織



５．これまでの研究内容

平成 23 年度の研究初年度は、「教科研究部」〔教科担当職員別に３部会を組織〕を設け授業研究を行っていたが、平成 24 年度からは「学年研究部」〔学年別に３部会〕とし、下記により年４回の公開授業を行った。平成 29 年度は各学年１回ずつ、年間３回の公開授業を行った。今年度は学習指導部に、「学び合い、高め合う授業づくり」という分掌をおき、検討を進めるとともに、昨年度と同様に年間３回の公開授業を実施する。また、今年度は第１回で１学年、第２回で２学年、第３回で３学年が道徳の授業を実施する。

＊授業研究会 実施日は「学びの共同体」講師 及び他校からの参観者が来校し、３・４校時の全授業を一般公開する。昼食後 帰りの会を行い、「焦点授業」実施クラス以外は速やかに下校させる。５校時を「焦点授業」とし、１クラスを残して授業を行う。５校時後「研究協議・講師の助言と講話」に傍聴・参加。

授業研究会の日課

朝の会	8:40～45	
１校時	8:55～9:40	〔45分授業〕
２校時	9:50～10:35	〔45分授業〕
３校時	10:45～11:35	〔50分授業〕
４校時	11:45～12:35	〔50分授業〕
昼食	12:40～55	
帰りの会	13:05～15	〔一般生徒下校〕（参観者は控室）
５校時	13:30～14:20	「焦点授業」（音楽室）
研究協議（音楽室）	14:40～15:20	
講師 助言・講話	15:30～16:30	

＊短時間でも「学び合い」場面を設定した授業構成で実施する。

・３・４校時に授業のない職員は授業参観をし、感想や気づいたことなどを授業者に伝える。

・５校時の「焦点授業」（音楽室）は全職員が参観し、生徒の学習活動の様子を中心に授業観察を行う。研究協議は「焦点授業」教室で実施。主に授業観察での「気づき・感想」の交流による協議をし、講師の助言〔３，４校時の授業を含めて〕、「学び合う授業づくり」の講話と質疑応答を行う。

＊授業研究会　＝ 授業公開日の放課後、ふり返りやすいように授業の教室で開催する。

・生徒の活動「学び合い」の様子を中心に話し合う

・話し合いの対象を「どう教えるべきだったか」におくのではなく、「子どもがどこで学んでいたのか、どこでつまずいていたのか」の事実におく。

＊日常の授業から、コの字型の机配置で授業を始め、男女混合４人グループ協同学習による「学び合い」場面の設定と学習意欲を高める学習課題・教材の開発に努める。

・簡略化した指導案（基本「授業デザイン」＝学習内容と「学び合い課題」基礎とジャンプ課題を盛り込むようにする）を使用する。

・話し合いにおいては参観者は「授業者への助言」ではなく、その授業の観察を通して自らが「学んだこと」を述べ、その多様性を交流し合い学び合う。

・話し合いにおいて参観者は積極的に発言すべきであり、声の大きい人や指導的な人に支配されない民主的な討議を実現すべきである。

６．昨年度の成果と課題　　焦点授業と研究協議について

５校時は「焦点授業」として、全職員が参観し、生徒の学習活動の様子を中心に授業観察を行った。これまで授業では，教師の単元・教材観や指導技術という側面ばかりに目が向けられがちであった。もちろんそれは授業を構成する重要な要素ではあるが、それ以上に大切なことは、生徒たちが何をどう学んでいるのか、「子どもの学びの事実・心理」にも目を向けた観察が必要になる。「子どもの学びの事実・心理」を観るには，参観者は、教室の後ろから授業を観るのではなく、教室の側面から、できれば前方の側面から観察（語りかけない、子どもの質問に答えない、ヒントを言わない、観察に徹する）するのが望ましい。これを具現化する方法として下記の「授業参観時に付箋紙を活用した取り組み」を取り入れた。

研究協議では「気づき・感想」の交流による協議をし、「学び合い」への参加の様子「わからないことをわからないと言えたか」、「教える生徒の教え方はどうであったか」など、自分の授業の様子との違いや新たな気づきがあったかなど、時系列でわかるようにした。研究会では指導案の評価、授業の巧拙や発問の技術、教材の検討ではなく、付箋紙をもとに生徒が、どの場面で、どの（誰の）言葉によって変化が起きたかを中心に、教室の中の生徒の活動に重きを置き、研究の中心課題とした。

昨年度の生徒のアンケート結果から、「学び合い」が生徒に定着しており、「学び合い」を通して気軽にグループの友達に分からないことを分からないときに聞くことができているようである。また、分かっている生徒もグループ内の友達に教えることにより、教え方を工夫したり、「学び合い」を通してより理解が深まるという意見もあった。一方、１年生では、グループ学習になると違う話をしてしまったり、意見を言う人がいないため「学び合い」が進まないなど、一部でうまくいっていないことも見受けられた。また、生徒が「学び合い」を多く設けてほしいと思っている教科は、数学科などの五教科や技術・家庭科に多く、学習のつまずきをなくしたいことと、作業時にグループで協力し合いたいと感じる生徒が多いことがうかがえる。

課題として、簡略化した指導案（「授業デザイン」）であるからこそ、教師は綿密な授業の展開や課題設定をし、幅広く生徒の反応を予測しなければならないことが挙げられる。また、「学び合い」を続けていくにあたり、「学び合い」の進め方やルールを１年生の初めのうちに徹底することや、座席を決める時にも配慮が必要であると感じる。他にも、学習活動が停滞するような４人グループがある場合の教師の支援の方法や、グループ編成の仕方も意図的にする方法も模索すべきであろう。

７．平成30年度 年間計画

月	研 究 会	内　　容
4	全体会（職員会議に際して）	今年度の校内研究の概要について
6	第１回授業研究会〔6/4(月)〕 小栗　凡知 教諭（数学）３年２組 （道徳）１年	公開授業・焦点授業について全体会 研究協議 授業のふり返りと今後の課題
7	第２回授業研究会〔7/3(火)〕 植木　秀志 教諭（道徳）２年１組	公開授業・焦点授業について全体会 研究協議 授業のふり返りと今後の課題
１０	第３回授業研究会〔10/26(金)〕 田中由美子 教諭（国語）１年　組 （道徳）３年	公開授業・焦点授業について全体会 研究協議 授業のふり返りと今後の課題
2～3	全体会 研究推進委員会	年間反省・生徒アンケート結果についての考察 研究推進の課題と次年度の方向性について

・昨年度までに取り組んだ内容を踏襲し、全教科で「学び合い」を取り入れた授業の実施をしていく。
・「学び合い」を進める中での問題点や疑問点、苦労していることなどを挙げ、講師に助言を受ける。

８．学校研究 構造図

【３つの力の育成】（「学習指導要領改訂の基本的な考え方」より）

① 「生きる力」～ 社会において自立的に生きるための力 ～

② 基礎的・基本的な知識及び技能の習得 とそれを活用する力

③ コミュニケーションや感性・情緒、知的活動の基盤である言語能力

【学校教育目標】

自他の生命と人権を尊重し、
ねばり強くたくましい、
心豊かな生徒の育成

み ➪ 自ら学ぶ生徒
な ➪ 仲間と学びあう生徒
み ➪ 認め合い支え合う生徒
が ➪ がんばり努力する生徒
お ➪ 己を大切にできる生徒
か ➪ 体と心を鍛える生徒

生活面の課題
人間関係に起因する不登校
コミュニケーション力の不足
⇒ コミュニケーション力の育成

＋

学習面の課題
全体的に真面目に学習に臨むが、知識
技能の習得に対して個人差が大きい
⇒ 授業での個々の「学び」の保障

《生徒の行動目標》
自ら学ぶ
仲間と学び合う
認め合い支え合う

《教師の指導目標》
基礎・基本の定着、コミュニケーション能力
育成のための「協同学習」※ の実践

※「協同学習」：小グループ（男女混合４人班を基本）でお互いに力をあわせ、助け合いながら学習を進めていく集団学習。協同学習のためにはグループ成員が、互いに顔を合わせて語り合い、継続して共同作業をすることが必須。
『協同的な学びは、なぜ必要なのだろうか。一つは協同的な学びを組織することなしに、一人ひとりの学びを成立させることが不可能だからである。もう一つは、一人ひとりの学びをより高いレベルに導くためには、協同的な学びが不可欠だからである。学びとは、対象（教材）との出会いと対話であり、他者（仲間や教師）との出会いと対話であり、自己との出会いと対話である。』
佐藤 学「学校の挑戦」より

学校研究テーマ

学び合い、高め合う授業づくり
～人間関係を育む教科学習～

《具体的方策及び課題》
協同学習：グループ活動による「学び合い学習」の実践、
支援方法、学習レベル、提示方法等の検討
グループ：４人（男子２名、女子２名。市松模様の座席配置）
を基本に、「学び合い」を推進
時間頻度：１時間の授業の中に、必ず１回は協同学習の場面を
設定（原則）、回数や「学び合い」時間等の検討
ルール　：普段の生活から話し合いのルール作り。発表の方法
（表現活動の場面）の検討

仮説１：「学び合い」を取り入れることにより、一人ひとりが主体的に学習に参加する機会が増えるとともに、「学び合い」により、理解不足の生徒はより理解しようと努め、理解している生徒はより理解が深まるだろう。そのことにより、基礎・基本の定着が図られるであろう。

仮説２：学校生活の大半を占める授業の中で、生徒同士の「学び合い」を通して様々な「出会い」と「対話」が深まり、言語活動が活性化されコミュニケーションの力が増すであろう。